

令和元年度病虫害発生予報第5号

令和元年7月3日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	葉いもち	平年並	平年並
		穂いもち	平年並	平年並
		紋枯病	平年並	平年並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	—	やや多い
		セジロウンカ	やや早い	やや少ない
		斑点米カメムシ類	平年並	平年並
		フタオビコヤガ	平年並	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	—	やや多い
		黒星病	—	平年並
		輪紋病	平年並	やや多い
		クワコナカイガラムシ	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並
カキ	炭疽病	平年並	やや多い	
	樹幹害虫 (ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ)	平年並	やや多い	
ブドウ	べと病	—	平年並	
果樹共通	カメムシ類	平年並	やや多い	
野菜	ネギ	さび病	—	やや少ない
		黒斑病	平年並	平年並
		白絹病	平年並	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		ネギハモグリバエ	—	やや少ない
		ネギアザミウマ	—	やや多い
	スイカ	つる枯病、炭疽病	—	やや多い
		うどんこ病	—	やや少ない
		褐色腐敗病、疫病	平年並	やや多い
		アブラムシ類	—	平年並
	イチゴ	ハダニ類	—	平年並
		うどんこ病	—	やや少ない
炭疽病		平年並	平年並	
ナガイモ	アブラムシ類	—	平年並	
	ハダニ類	—	平年並	
ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並	

気象予報（抜粋）

1 か月予報（6月29日～7月28日：6月27日、広島地方気象台発表）

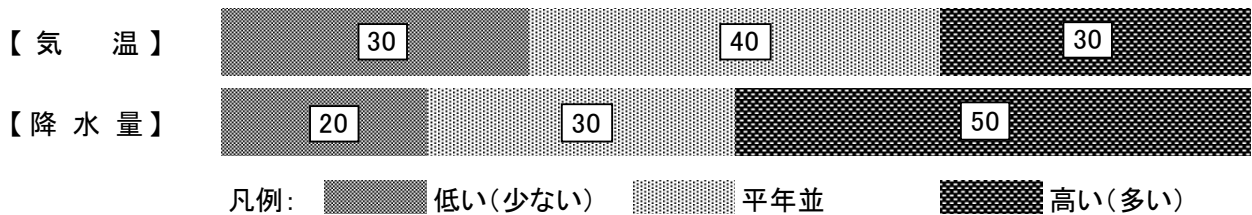
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

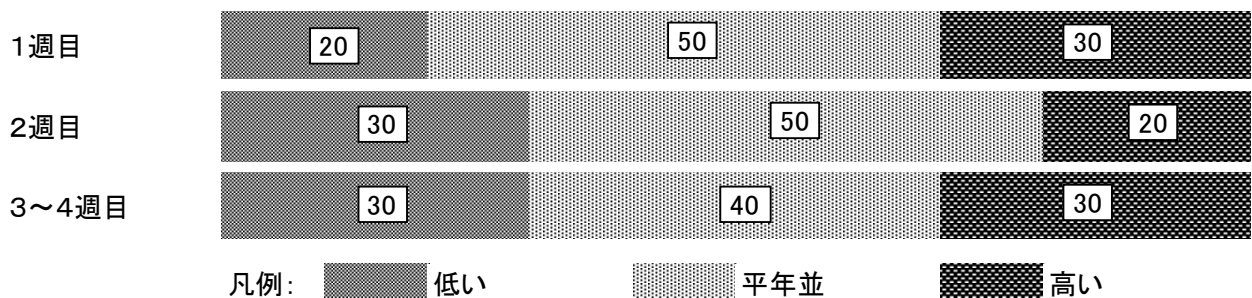
向こう1か月の降水量は多い確率50%です

週別の気温は、1週目は平年並の確率50%です。2週目は平年並の確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月1日現在、本病の広域発生は確認されていない。

イ 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は、平年と同様に認められていない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、7月は平年に比べ曇りや雨の日が多いと予想されている。また、向こう3か月の気象予報によると、8月は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。以上のことから、発生時期及び発生量は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 上位葉に急性型病斑がみられた場合、病虫害防除指針等を参考にして、直ちに治療効果のある粉剤、水和剤などにより防除を行う。

- イ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などの本病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。
- ウ 補植用置き苗は、本田における発生源となることが多いため、直ちに処分する。
- エ 長期効果持続型の育苗箱施用剤を使用しているも、十分な防除効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、本病の早期発見に努める。
- オ 降雨が続く場合は雨の止み間に防除を行い、適期を失しないようにする（粉剤散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある）。
- カ 本田施用粒剤（オリゼメート粒剤等）を使用する場合は予防散布が基本であり、発生後では十分な効果が得られない。なお、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認して、止水期間を少なくとも1週間とするとともに、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- キ 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。なお、本系統の育苗箱施用剤については、引き続き県内全域において使用を控える。

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域	早期栽培地域及び早生品種栽培地域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月2日現在、5月上旬移植のイネの出穂期は平年と予想されることから、発生時期は平年並と予想される。
- イ 穂いもちの伝染源となる葉いもちの発生は平年並と予想される。
- ウ 向こう1か月の気象予報及び向こう3か月の気象予報によると、7月は平年に比べ曇りや雨の日が多く、8月は平年と同様に晴れの日が多いと予想されている。葉いもちの予想発生量と気象予報から、穂いもちの発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う。
- イ ほ場をよく観察して葉いもちの発生に注意し、本病の早期発見に努める。上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤などで葉いもちの防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における本病の発生は平年並である。
- イ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生の多いほ場では、幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。「コシヒカリ」では、出穂前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を防除の目安とする。特に、昨年の発生量が多かったほ場では、発生状況に十分注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 前年の縞葉枯病の発生は多かったが、発病程度は低かった。
- イ 前年のヒメトビウンカの発生は多く、本種の越冬量が多いと予想される。
- ウ 6月第5半旬現在、ヒメトビウンカの予察灯への誘殺数は平年並である。
- エ これまでの経過及び向こう1か月の気象予報から、縞葉枯病及びヒメトビウンカの発生量は平年よりやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の多発地域において、ピメトロジン剤又はピラキサルト剤を含む育苗箱施用剤に使用していない場合は、7月中旬～下旬頃に水和剤などで本虫の防除を行う。
- イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないよう注意する。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域（特に沿岸部）
発生時期 やや早い
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月第5半旬現在、予察灯への初誘殺日は平年よりやや早く、誘殺数は平年よりやや少ない。
- イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年よりやや早く、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後、梅雨前線が活発化した場合は多飛来も予想されるので、ほ場における生息密度に注意し、今後の病虫害発生予察情報を参考にする。
- イ 防除適期は、平年よりやや早い7月下旬になるものと予想される。発生が多い場合は、病虫害防除指針等を参考にして、粉剤、粒剤などで防除を行う。なお、この時期の要防除水準は10頭（寄生成虫・幼虫数）／株である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域及び極早生品種栽培地域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月2日現在、5月上旬移植のイネの出穂期は平年と予想されることから、発生時期は平年並と予想される。

イ 6月第5半旬現在、アカスジカスミカメの予察灯への総誘殺数は平年並～やや少ない。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア イネの出穂20日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。草刈りは地域一斉に行うと効果が高い。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、穂で増殖したカメムシ類を水田に追い込むので、出穂期の草刈りはイネ科雑草が穂を付ける前に行う。

イ 周辺雑草地にカメムシ類の発生が多い場合は、穂揃い期～乳熟初期に、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤、水和剤などを散布する。

ウ 粒剤を使用する場合は、病害虫防除指針等を参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。また、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

エ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では、本種の越冬密度が高い可能性があるもので、発生状況には十分注意する。

7 フタオビコヤガ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、第2～4世代幼虫の発生時期は平年並の7月第2半旬～8月上旬と予想される。

イ 6月第5半旬現在、本種の予察灯への総誘殺数及びフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種に対して効果が高い育苗箱施用剤（スピノサド剤、スピネトラム剤又はジアミド系の殺虫成分を含む育苗箱施用剤）を使用していない場合は、7月第3半旬頃より幼虫の食害が増加し始めると予想される。

イ 7月中旬以降、穂ばらみ期防除の1週間前までに要防除水準（暫定版：下記の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が1.2cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）に達した場合は、病害虫防除指針を参考にして、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。

上記の時期に要防除水準に達していない場合は、穂ばらみ期に、粉剤、水和剤などを散布する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月中旬の現地ほ場における巡回調査では、新梢葉の平均発病葉率は0.9%（平年：1.1%）と平年並、平均発病果率は0.6%（平年：1.0%）と平年に比べて低かった。

イ 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）における新梢葉の発病葉率は9.5%（平年：2.8%）と平年に比べて高い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により新梢葉の発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7～10日とし、新梢葉の発病の多い園ではこれに加えて追加防除を1～2回行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

エ 散布に当たっては、薬液が新梢の先端まで十分かかるように丁寧に散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発 生 量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月中旬の現地ほ場における巡回調査によると、果そう葉の平均発病葉率は0.9%（平年：0.6%）、果実の平均発病果率は0.2%（平年：0.2%）といずれも平年並であった。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に薬剤散布を行う。

ウ 薬剤は、かけむらがないように丁寧に散布し、薬液のかかりにくい園の周辺部や枝葉が混み合ったところなどは手散布等で補完散布を行う。

エ 薬剤は、ベルコートフロアブル1，500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、キャプレート水和剤600倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 昨年の発生量は平年並であり、伝染源のいぼ皮病斑の量は平年並と予想される。
- イ 向こう1か月の気象予報から、本病の発生に好適な条件になることが予想され、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の被害は果実袋で予防できるが、袋掛けが遅くなると発病が増加するので早めの袋掛けを心がける。また、無袋栽培では梅雨明けまでの薬剤防除を徹底する。
- イ 枝における発病を防ぐため、枝にも薬液がかかるよう注意する。
- ウ 薬剤は、キャプレート水和剤600倍液、アリエッティC水和剤800倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、ベルクトフロアブル1,500倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、クワコナカイガラムシ第一世代幼虫のふ化は確認されていない(平年：7月4日)。
- イ 前年度、本種による果実被害は平年並であったため、越冬虫密度はほぼ平年並と予想される。
- ウ 向こう1か月の気象予報及び調査卵のうの様子から、ふ化幼虫の発生盛期は平年並の7月8日頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤はスミチオン乳剤1,500倍液、モスピラン顆粒水溶剤4,000倍液、ダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。
- イ 薬剤の散布に当たっては、カイガラムシ類が集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0頭（平年：0頭）と平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。
- イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。
- ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはカネマイトフロアブル1,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液、ダニコングフロアブル2,000倍液などを、クワオオハダニには前述の薬剤に加えて、バロックフロアブル2,500倍液などを使用する。
- エ ナシ園の下草は、ハダニ類の発生源となるので草刈を励行する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月中旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数はほぼ平年並であるが、一部で誘殺数の多いほ場が認められる。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年並の7月中～下旬頃、モモシンクイが第2回成虫の発生最盛期は平年並の8月上～中旬頃で発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 薬剤はモスピラン顆粒水溶剤4, 000倍液、ダイアジノン水和剤34の1, 000倍液、スミチオン乳剤1, 500倍液、サムコルフロアブル10の5, 000倍液、オリオン水和剤40の1, 000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カキ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であったため、伝染源量も平年並と予想される。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病原菌は、緑色のやわらかい新梢に感染しやすい。

イ 発病が認められた新梢や幼果は必ず切除して、園外に持ち出す。

ウ 薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを使用する。

2 樹幹害虫（ヒメコスカシバ、フタモンマダラメイガ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 昨年の樹幹害虫の被害はやや多く、発生量はやや多いと見込まれる。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除は幼虫の食入防止を目的に、春の1回目処理から2～3か月後の7月を目安に処理を行う。

イ 薬剤はガットサイドSの1.5倍液を樹幹害虫の被害が多い部位（樹幹部や枝基部）を中心に散布又は塗布する。なお、ガットサイドSの使用基準は、使用時期が

産卵期～幼虫喰入初期、但し収穫45日前までであるため、特に早生品種では使用時期に注意する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（砂丘地農業研究センター）及び現地ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。

イ 発病した葉や果実は伝染源となるため、できるだけ取り除き、園外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤の散布は、園の周辺部や枝葉が混み合ったところなどにかげむらがでないように丁寧に散布する。特にハウス栽培では、谷間やビニールのつなぎ目の、雨水の流れ込む部位に発病が多いことから防除の際はこの部分の防除を徹底する。

エ 薬剤はホライズンドライフロアブル2，500倍液、ムッシュボルドーDFの500倍液、ICボルドー48Qの50倍液などを使用し、散布にあたっては、果実の果粉溶脱に注意する。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における6月中旬までの総誘殺数は平年と比べてやや多かった。

イ 向こう1か月の気象予報から、果樹園への飛来時期は平年並の7月中旬～8月上旬頃で発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月中旬～8月上旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。ただし、多発生年の場合、7月上旬頃から果樹園への飛来量が増加した事例がある。

イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ナシ、カキ、リンゴ及びモモを対象としてジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）

2，000倍液、ナシ、カキ及びモモを対象としてアグロスリン水和剤2，000倍液、ナシ及びリンゴを対象としてMR．ジョーカー水和剤2，000倍液などを散布する。

野 菜

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 本病は気温が24℃以上では発生が抑制される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1，000倍液などを使用する。発病後は、上記の薬剤にカリグリーンを800倍で混用して散布するか、アミスター20フロアブル2，000倍液、ファンタジスタ顆粒水溶剤3，000倍液などを散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1，000倍液、ポリベリン水和剤1，500倍液などを使用する。発病後は、ロブラール水和剤1，000倍液などを散布する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は確認していない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月上旬の土寄せ時に、モンカット粒剤10a当たり4～6kg、モンガリット粒剤10a当たり4～6kgなどを株元散布する。

イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2，000倍液などを株元散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は確認していない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷が付くような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ 植付後2か月以上経過し、収穫まで1か月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ時に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元に散布する。

ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液、ヨネポン水和剤500倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるネギハモグリバエの発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、ハチハチ乳剤1,000倍液、スピノエース顆粒水和剤2,500～5,000倍液、ディアナSC2,500～5,000倍液などを用いて、7～10日間隔で散布する。

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるつる枯病、炭疽病の発生量は平年並である。

イ つる枯病及び炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 雨滴のあたる箇所又は株元から発病するので、薬剤散布は株元及びつる先にも薬剤がよくかかるように丁寧に行う。
- イ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を5～7日程度とし、雨のやみ間に防除する。
- ウ 薬剤は、アントラコール顆粒水和剤400～600倍液、ダコニール1000の700倍液などを用いて予防散布する。発病後は、ポリベリン水和剤1,000倍液、アミスター20フロアブル2,000倍液、シグナムWDG1,500～2,000倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は確認していない。
- イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からトリフミン水和剤3,000～5,000倍液、ポリベリン水和剤1,000～2,000倍液、プロパティフロアブル3,000～4,000倍液、ラミック顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は確認していない。
- イ 褐色腐敗病及び疫病は多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように対策を講じる。
- イ 毎年、疫病の発生するほ場では、ジマンダイセン水和剤400～600倍液を予防散布する。
- ウ 褐色腐敗病の発生ほ場ではリドミルゴールドMZ1,000倍液、ホライズンドライフロアブル2,500倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量は平年に比べてやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、コルト顆粒水和剤4,000倍液、ハチハチフロアブル1,000倍液

などを使用する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、マイトコーネフロアブル1, 000倍液、ダニサラバフロアブル1, 000倍液、コロマイト乳剤1, 000倍液などを使用する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における育苗床での本病の発生は確認していない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1, 000倍液、サンヨール500～1, 000倍液、アフェットフロアブル2, 000倍液などを使用する。

ウ 発病後は、トリフミン水和剤3, 000～5, 000倍液、モレスタン水和剤3, 000～4, 000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における育苗床での本病の発生は確認していない。

イ 本病は高温多湿で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗時、頭上かん水は発生を助長するため底面給水を行う。

イ 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、及びランナーにも薬剤が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

ウ 育苗初期は、アミスター20フロアブル2, 000倍液、ゲッター水和剤1, 000倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

エ その後は、ベルコートフロアブル1, 000倍液、デランフロアブル

1, 000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、チェス顆粒水和剤5,000倍液、ベストガード水溶剤2,000倍液などを使用する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地のイチゴ育苗床におけるハダニ類の発生量は平年に比べてやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からサンヨール500倍液、アーデント水和剤1,000倍液などを散布する。発生が多い場合はコロマイト水和剤2,000倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は確認していない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル1,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを使用し、予防散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病虫害防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第6号の発表は、8月7日(水)の予定です。
なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますのでご注意ください。